

イタリア統一（1861）

パオロ・ロズポーネ

イタリア統一について話す前に、前置が一つ必要だ。

1861年に成立し、第二次世界大戦まで相次ぐ領土の変化と共に発展してきたイタリア国家は、紀元前3世紀に始まって紀元前1世紀にアウグストゥスにより完成された“古代ローマ”のイタリアの後継者ではない。

それはひとつの伝説で、ある者は善意から、また別の者、特にムッソリーニが、本来は平和的な国民を軍事に傾かすために、悪意からあおったものだ。共和制および帝制古代ローマとイタリア国家との間には、約20世紀の空白がある。

西ローマ帝国が倒れ（476年）、帝国の権力はローマからコンスタンチノーポリ（コンスタンチノープル）に移る。それに伴ってローマでは教皇の権力が固まる一方、イタリアは外国人征服者たちの征服と分割の対象となる。

これらのある者は、アジアの大草原から（フン族）、あるいはゲルマニア（ゴートやロンゴバルド）から来た蛮族である。また別の者は、北ヨーロッパから来て、政治や芸術の文明をもたらした（ノルマン）。はては、チュニジアから来て、シチリアを占領し統治した（サラセン人）：これらの支配は、イタリアの領土の様々なところで5世紀以上続いたが、継続したわけではない。

これら外国からの侵略者に対して、ビザンチン（コンスタンチノーポリのローマ皇帝）の政治的・軍事的権力と、とりわけ教皇庁の活動が対抗する。

イタリアでのこうした外国人の長きにわたる多様な存在は、必然的に、イタリア人の性格・習慣・文化の中に反映した。こうした文化的多様化のプロセスは、外国人支配特にオーストリア・フラン

ス・スペインの支配が原因で、イタリア統一まで何世紀も続いた。これが、イタリア人が、日本人に典型的なあの国民的一貫性の性格を示さない理由である。

オーストリアの外相メッテルニッヒは、ウィーン会議（1815年）でイタリアを“地理上の一表現”と定義し、明らかな軽蔑の意味でそう言った。しかし、一人の偉大なイタリア人、マッシモ・ダセリオも、“イタリアはつくられた、イタリア人をつくる必要がある”と言ったが、今もまだ誰も成功していない。第一次世界大戦までに自由主義政府は、植民地を征服したにもかかわらず、これに成功しなかったし、国の境界の拡張を可能にした第一次大戦も成功しなかった。ムッソリーニもその帝国主義的な衆愚政治にもかかわらず、これに成功しなかった。ナチスドイツに対する解放戦争もこれに成功しなかったし、それどころかファシストと共産主義者の間の憎しみと恨みを、和らげることなく引きずり続けた。

イタリア人は個人主義者であり、最大限でも自分の州-市あるいはコントラーダ(地区)に自己を一体化する(例えばシエナのパリオ)。イタリア人が経験する唯一の国民的感情は、サッカーのナショナルチームを応援する時だろう。ベルルスコーニが、スポーツジャーナリズムの一つの決まり文句(「グランドに降りる」)を使って政界に入り、自分の党にファンの熱狂的な応援の声(Forza Italia「頑張れイタリア」)の名前を付けたのも、それゆえである。

しかし彼は、イタリアの国民的精神を一つにしなかったどころか、むしろ分裂を深めることに貢献した。

西ローマ帝国の滅亡(476年)からイタリア統一(1861年)までの長い期間は、教皇庁が“国民的”と定義されうる唯一つの政治的主体であった(ルネサンスの時代以後法王は全て、三人を例外として、イタリア人であり、領土内で任に当たる司教も司祭も宗教団体もそうである)。

教皇庁は、蛮族の侵入の世紀の間は、イタリア国民のため確かに肯定すべき活動を行った。すなわち蛮族からの防御で、軍隊によってではなく、蛮族のキリスト教への改宗や修道士の修道院-大修道

院の創設によって、これは農業経済と職人階級の再生をうながし、写本の転記でもって古代ギリシャ-ローマの文化遺産を救うのに貢献した。

しかし、そうした積極的な活動はイタリアの政治的統一の方には向けられなかった。というのは、ローマ教会は、数世紀にわたって相次いだ外国人支配者の力が国全体に広がるのを、あらゆる形で阻止したからである。

ローマカトリック教会のこうした政治は、イタリア国家の側からのローマ征服（1870年）まで続くことになる。

教皇庁は実際、領土的至上権は自らの宗教的使命に絶対必要であるとみなしている。“ローマ教会の世俗権”と定義されるこうした教義は、いわゆる“ピピンの寄進”の結果である。

このフランク人の王は、756年イタリアでビザンチンから征服した領土を法王に寄進したのだった。

そのため法王たちは、ランゴバルド人の試みに反対したのみならず、はては、イタリアを統一することを望みまた出来たであろう一人の偉大な皇帝、シュワーベン（神聖ローマ帝国）のフェデリーコ2世にまで反対したのだった。フェデリーコ2世は、イタリアに生まれ、イタリアを愛し、政治的能力と軍事力を持っていたから。

教皇庁は、ノルマン人によるイタリア南部の征服（9世紀）のみ支援し、それは後にナポリシチリア王国となる。

一方イタリア北部と中部では、ローマ教会は、司教たちの活動によって、コムーネすなわち経済的、社会的、芸術的、文化的エネルギーに富む市民たちの小さな都市国家の発生に貢献した。

それらコムーネ（自治都市国家）は、まさしく中世イタリアの政治の独自性を形成し、封建主義に対するヨーロッパ文明への貢献を特徴付けている。すなわち、コムーネ（自治都市国家）、シニョリーエ（領主国家）、貴族制都市国家、海洋共和国（アマルフィ、ピーサ、ジェノヴァそしてとりわけヴェネツィア）である。

1 1世紀にさかのぼる、北および中部イタリアの政治構造と南イ

タリアのそれとの間のこの二元性も、イタリアの経済的、社会的、文化的統一にはネガティブな結果となり、それは今も存在し、克服困難である。

とすると、一体どうしてローマ教会自身がイタリア統一を実現しなかったのか、自問する必要が出てこよう。

次のように答えられるだろう。すなわちローマカトリック教会は、イスラムとは異なり、政治的・宗教的手段でのみ行動した、それゆえイタリアを軍事的に征服することはなかった、と。

そして19世紀ヨーロッパに民族革命の時がやって来た時、法王ピオ9世は、ジョベルティの理論(ネオグエルフイズムモ=新教皇主義)にのっとなって多くの者が彼をイタリア国家連邦の大統領にと願ったが、革命の恐れのためにその役割を回避した。事実、ローマそしてイタリア各地で革命が勃発した(1848年)。

教皇権の政治的役割は、日本人によく知られている。事実、ヨーロッパへの日本人の最初の使節団は、一人の法王(グレゴリオ8世)によって組織されたが、法王が日本の政治上のことに介入するかも知れないという恐れから、キリスト教徒の迫害が引き起こされた。

中世から統一国家まではほぼ一千年のイタリアにおける政治権力の様々な出来事を数行で要約することは難しい。

そしてそこでも、イタリアの歴史は日本の歴史とは大きく異なっている。転換と政治危機もあったが、常に国民の統一という目標があったからである。

それは日本では、一貫性のあるやり方で宗教上政治上の二重の役割を演ずる皇室の存在にかかっているのだと、私は思う。

天皇は、神道の最高の聖職者である(現行憲法以前は神の大権まで誇っていた)と同時にその保証を代表する統一国家の首長である。それに対してイタリアでは、よく言われるごとく、キリスト教徒の首長である法王は、国の宗教上の統一は望むが、政治的な統一は阻む。この教皇権の方向はイタリア統一のあと徐々に変わり、1929年のラテラノ条約(国と教会の和解)でもって決定的に解消される

ことになる。

コムーネの時代(8 世紀)からリソルジメント(イタリア国家統一運動)にいたるイタリアの政治的分割のなかで、安定した状態はあまりなかった。事実、ヴェネツィア共和国と、部分的に教会国家を除けば、イタリア領土の残りのほとんど全部は、安定した政治体制を全く持たなかった。ナポリ王国(領土としては最大のもの)もまた、ヨーロッパ勢力(フランス、スペイン、オーストリア、英国)の征服と交換の対象であった。

ヴェネツィアと教会国家と共に唯一つの例外と判断されるのは、トスカーナ大公国(メディチ家)とピエモンテ君主国(サヴォイア家)である。

イタリアを統一することになるのは、まさにサヴォイアであろう(サヴォイアは部分的にイタリアの自然的境界の外の一地域から来ている)。フィレンツェはそれを出来なかった。というのは、メディチ家は、ローマ教会に四人の法王を出し、フランスに二人の女王を出したが、1737年に絶えたからである。ヴェネツィアも出来なかった。イタリアの都市国家の中では唯一地中海の沿岸や島々で領土を征服したが、その共和国(ヴェネツィア)は、ウイーン条約(1815年)がその領土をオーストリアの皇帝に割り当てる前に、ナポレオンによって消されたからである。

つまり、イタリア統一が実現したのはピエモンテの王国(サヴォイア)の推進力によってであった。そしてそれが起こったのは、ピエモンテが一つの軍隊をもっていたこと(多くの戦いで勝利していなかったが)、そして何よりも政府の一人の長(カブール)がいたためである。彼は、並はずれた政治と統治の直観力、経済の権限、そして大きな外交能力を持っていた。しかしながら、サヴォイアの王家の関心とカブールの政治上の関心は、北イタリアで王国の領土を拡張することに限られていた。

国の統一は、もう一人の偉大なイタリア人、ジュゼッペ・ガリバルディの行動にゆだねられた。

イタリア国家統一運動(リソルジメント)が発展する政治的・精神的雰囲気は、フランス革命(1789年)の民主主義的原理によってヨーロッパ人の中に引き起こされた期待と、ナポレオンの征服の旋風のあとのウィーン会議(1815年)で出された君主制復興との間の葛藤から生まれる。

この雰囲気の中で、二つのイデオロギーが代表となり、そして衝突する。すなわち、憲法上の君主制と中産階級の政府へと向う自由主義的イデオロギー(イギリスに代表される)と、共和制と人民階級の政府へと向かうジャコバン党と社会主義者のイデオロギー(フランスに啓発されたもの)である。

これらのイデオロギーはもともと、国民国家の原則に基づいて人民の開放を意図していたが、しかし闘いの行動、国家の構造、憲法形態、指導階級に関しては、方法も目標も違っていた。

オーストリア皇帝が復古と抑圧のシンボルであったため、彼は、19世紀前半にイタリアで展開され、1861年に終わり、リソルジメントという名になる民族闘争の主要な目標となった。

日本人にはイタリア統一に至る過程のすべてを知ることは難しく、また不必要だろう。こう言えば十分であろう、何十年かの協調なき陰謀、さらに(抑圧と犠牲と共に)イタリアの様々な地域での対立の後、1848年に最初の重要な動きがあった。

当時のイタリアの政治的・領土的形態は、ウィーン会議(1815年)にさかのぼる。

イタリアは8つの国に分割された。その領域は異なり、政府はほとんど全部外国の君主であった(ハプスブルグのランゴバルド・ヴェネト、ブルボンのナポリ王国、ハプスブルグ・ロレーヌのトスカナ)。

(地図)

教皇領(イタリア人法王)とピエモンテ-サルデーニャ王国(サヴォイアはフランスの出であるので、フランス語を話すイタリア王)があった。

イタリアの革命は、(1848年2月24日の)パリ革命を追って発生し、北の大都市(ヴェネツィア、ミラノ)そしてシチリアを巻き込んだ。ピエモンテの王カルロ・アルベルトは、オーストリアとの戦い(第一次独立戦争)に、ピエモンテ人と他のイタリアの国々とボランティエからなる軍隊の長として立ったが、政治上の原因と軍事的敗北のためにすべて失敗する。カルロ-アルベルトは退位し、息子ヴィットリオ・エマヌエル2世に譲位する。

イタリア国家は12年後ほとんど偶然に、つまり正確なそしてこの結末に向った政治的意思なしに、実現することになる。

イタリア統一は、何世紀にもわたって、文化面の偉大な人物たち(ダンテ、ベトラルカ、マキャベリ、レオパルディ)の熱望であった。しかし、中世のランゴバルドとシュワーベン(ドイツ)の王や帝王たちの企てが法王の敵意のために挫折し、フランスとスペインの間で争われた広大な領土の王国が南部に固まってからは、政治上と王家の目的を形成しなかった。

イタリア王国をつくるという最初の試みは、事実、フランスとオーストリア帝国の間の"クッション国"として、1804年のフランス皇帝ナポレオンに帰せられ、そしてナポレオン三世は、ピエモンテ王国を北イタリア全体に広げるというヴィットリオ・エマヌエル2世の渴望を支援すべく、50年後に同じ目標を提案することになる。

ヨーロッパの宮廷やその秘書局から仮説として立てられたイタリア統一の最大値は、法王を大統領としてその下にイタリアの国々が連合するという形だった。前述したごとくイタリア人ヴィンチェンツォ・ジョベルティ("ネオゲルフィズモ")により理論づけられたこのよう連邦主義的仮説は、政治の世界では、サヴォイアのヴィットリオ・エマヌエル2世の下にイタリア統一が実現しようとしていた前夜の、ポレオン3世の立場でもあった。

では、イタリア統一はどのように実現するかみてみよう。

この計画の主役は、基本的には 4 人であった。イタリアのことはよく起こるように、何事にも意見の一致はなかった。何よりも国の政治体制について、彼らの二人(ピエモンテの王ヴィットリオ・エマヌエルとその政府の長カミッロ・カブール)は、君主制にねらいを定めていたのに対して、他の二人(知識人で革命家のジュゼッペ・マッツイーニと戦士のジュゼッペ・ガリバルディ)はそうではなく共和制を望んでいた。ピエモンテの君主とカブールは、オーストリアと戦ってロンバルト - ヴェネトを取り上げ、自分たちの王国を北イタリア全体に広げることが望んでいた。他方、ガリバルディとマッツイーニは、もっと広い目標を提案していた。すなわち、君主制に反対し何よりも法王に反対して、革命と国全体の軍事的征服によって、共和国の形のイタリア統一というものであった。

彼らは皆、北部イタリア、いやむしろピエモンテ王国生まれだった。それ故、統一の主人公たちの中に南部の者はいないし、そうした状況は国の将来の出来事にとって好ましい要因ではなかった

イタリア統一の主要な造り手の中に、日本人は多分、ジュゼッペ・マッツイーニとジュゼッペ・ガリバルディを知っているだろう。

マッツイーニは、偉大な思索家、政治扇動者であり、青年期(1805年生まれ)から祖国の自由と統一というロマン主義思考に満ちていた。そして人生の大部分を追放の中に過ごした。

彼の思想と革命家としての根強さは計り知れない魅力をもつが、直接にはイタリア統一に貢献していない。彼は共和国を望んだが、これから見るように、国はピエモンテの王によって統一されることになる。

革命の主役たちの中でガリバルディは、多分名前が世界で一番知られているだろう。彼もまた共和主義的な思想の持ち主であったが、イタリア統一はピエモンテの王によってのみ実現され得ることを理解する政治的見透しがあったし、その役割を忠実に行った。また、南アメリカでも人民の解放のために戦ったし、天才的なすぐれた指揮官であった。また、とても女性に愛された。悪意を抱くものたちは次のようにほのめかす。すなわち、彼は自分の志願兵(ガリバル

ティーニ)でもってに劣らず、たくさんの小さなガリバルディを残すことを可能にした愛の寛大さによって、イタリア統一に貢献したと。その子孫は今なおその姓を伝えている。

イタリア統一の最も重要な政治的・軍事的節目は次のとおりである。

1. ピエモンテは、カルロアルベルトを継いだ新しい王ヴィットリオ・エマヌエル 2 世と、その父により制定された憲法上の政体(“STATUTO”憲法、法律)を保持し、それゆえイタリアのすべての愛国者の注目の的になる。

このようにして、徐々に政治的・経済的エリートのなかに、統一はピエモンテのリーダーシップによってのみ実現できるという意見が生じる(国民社会、1857年)。

ガリバルディも、共和国の考えを捨て、ヴィットリオ・エマヌエルに仕え始める。

2. ピエモンテ州の首長カブールは、オーストリア帝国に対抗してフランス皇帝ナポレオン 3 世との同盟を得る。

3. オーストリアは、ピエモンテへの戦争を宣言する。ナポレオン 3 世の指揮とガリバルディの貢献のもとに、フランスとピエモンテの軍はいくつかの戦いに勝利し、次いでナポレオンはオーストリアと分離した平和を決め、交換にピエモンテの王にロンバルディアを得させる(1859年)。この解決はカブールには不満だった。なぜならそれは、統一イタリアではなく、オーストリアからフランスを守るより広い領土をもった 1 つの“クッション国”としてのピエモンテ王国を望むフランスの利益に適うものだったからである。

4. 千人の志願兵(千人隊)の指揮官としてのガリバルディは、ヴィットリオ・エマヌエルの明白な同意なしに、ジェノヴァから船に乗り、シチリアに渡る。そこで蜂起したシチリア人の支援を得て、ナポリ王国の軍隊と戦い、幸運もあってシチリアを征服した。そしてメッシーナ海峡を渡り、半島を北上してナポリ王国を征服し、それをヴィットリオ・エマヌエル 2 世に引き渡す。中部の国々(トスカーナ、パルマ、モデナ)も蜂起し、ピエモンテの付属国になることを民主的に決める。

ピエモンテの軍は、教皇国家のほとんど全部(ロマーニア、マル

ケ、ウンブリア)を征服し、法王にはラツィオだけを残した

5. イタリア王国が宣言された(1861年3月17日の法律)。

(地図)

6. プロセインの援助で、イタリアはなおオーストリアと戦い、ヴェネトを獲得する(1866年)。

7. 法王を守っていたナポレオン3世は失脚し、イタリア軍はラツィオを占領し、イタリアの首都となるローマを征服する(1870年)。

イタリア領の境界は、続く数十年の間に変化する。

第一次世界大戦のあと、帝国(トルコ、オーストリア、ジェルマニア)の崩壊とロシアでの人民革命があり、イタリアはフランス、イギリス、アメリカと共に勝者となり、トレンティーノ-アルト・アディジェ(部分的にはオーストリア地域)、トリエステ(イタリア)、イストリア(一部はスラブ地域)を獲得する。

(地図)

第2次世界大戦とともに、イタリアはユーゴスラヴィアのためにイストリアとトリエステの大部分を失った。また、フランスのために西方領土の小規模な減少があった。

(地図)

今日のイタリア領は、人口は6000万人強、面積は30万平方キロより少し小さい。

イタリア領土内に、イタリア共和国以外に、エミリア-ロマーニャ州のサンマリノ共和国とローマのバチカン国という小さな二つの国が居残っている。

統一国家の政治組織は、州の制度とともに変えられた。この体制は(たとえばドイツのような)連邦国家とは違い、国一州の問題を少なからず生じさせる。法律の点でも(州もまた立法議会を持つ)、組織と官僚のコストの点でも。

しかし、この国家形態は統一的ではなく、連邦でもなく(イタリア的形態)、われわれの議論の話題でもない。

イタリアの統一は、日本人がたいへんよく知っているピッツァ・マルゲリータ(イタリアの女王の名誉のため一人のナポリ人により作られた)の三色の中にのみ今なお勝ち誇っている。すなわち、トマトの赤、モッツァレラの白、バジリコの緑である。

ピッツァ・マルゲリータ万歳、イタリア万歳、日本万歳！！

2014. 4. 12 Hashimoto 訳

(本稿は、2014年3月イタリア語サロン(ブツァーティ読書会)でのパオロ・ロズポーネ氏の講義「イタリア統一」を、橋本昌氏(故人)が訳したものである。2019. 1. 31 高田記)